

ガンダーラ美術の変貌 —秋の特別展を回顧して—

暑い夏の間の準備期間を経て開催された恒例の秋の特別展「ガンダーラの彫刻」は、10月初旬に無事終了の幕を閉じました。国内の各地から拝借した品々の返却の旅も滞りなく終り、ほっと一息ついた頃には秋もたけなわとなっていました。当館の二十五周年を記念したこの特別展の思い出と共に、早や今年も残り少ない日々です。一つの仕事のまとめの意味で、前号のこの欄で書き残したガンダーラ彫刻についての所見を記してみたいと思います。

ガンダーラ彫刻と言えば、ギリシャ・ローマ式仏教美術と仏像の始まりという点が強調されており、それ以前にもコインに表わされた肖像彫刻や、数々の神像彫刻が造られたことは余り知られていませんでした。今回の展覧会は、わが国で初めて、そういったものも含めて、国内の優れたガンダーラ彫刻を集めて見たのですが、「日本にこれ程良いものがあるとは知らなかった。」「豊富な内容が楽しかった。」という多くの声が聞かれたのは幸いです。

考えれば、東洋に生まれた仏教が、西洋の美術様式(神を表わす人

体彫刻)によって仏の像を獲得したということは、その後の仏教の歩む道筋を象徴的に語っていたように思われます。すなわち、仏教は、インドより、北を回る大乘仏教においても、南伝の小乗仏教においても、他の土着の宗教を排撃することなく、むしろ巧にそれらと融合して、諸国の文化の中に浸透して行ったと考えられるからです。そのような仏教の寛容性・柔軟性が仏像の創始期に既に現われているように思えます。

ガンダーラで作られた仏像の様々な形が、中央アジア・中国・韓半島・日本と伝えられる内に、その祖型は残しながら、各国の民族性に合った様式に少しずつ変貌して行ったことにもそれが見られます。今回陳列した作品と我が国の仏像を比べることによっても、その一端を知ることが出来ます。

例えば、ガンダーラに見られる上半身裸形のアトラスやバジュラパーニーの姿は我が国の天平時代や鎌倉時代の二王像や執金剛神像に結実していますが、裸身の筋肉表現においては、ガンダーラはより自然的であり、日本においてはより形式的誇張的であるという点



平山都夫先生 (9月15日)

が指摘できます。ガンダーラにおける菩薩像の極めて男性的な力強さは、日本においては女性的な官能美に変化しており、薬師寺の日光・月光像などがそれに当るものです。

釈迦の誕生にまつわるシーンにおいても、わが国では生まれてすぐに自らの足で立って歩かれ、右手を上げて天を指し、左手を下げて地を指しながら降誕宣言をされるわけですが、ガンダーラにおいては、小さな太子は両腕を下げた姿で表わされています。

仏像の細部表現においても次のような相異に気付かれます。如來の頭髪スタイルは、ガンダーラでは自然に波立つ形が圧倒的に多く、それが徐々に形式化して行くのを見ますが、我が国におけるように螺髪形を見るのは、かなり後期になってからで、今回の展覧会には一点も含まれていませんでした。菩薩の頭部は、日本においては、頭頂で髪を束ねて丸めた形の宝髻を結び、宝冠を頭に載せていますが、ガンダーラでは、宝髻をもっと自然の形に結び上げ、簡素な、多くは連珠形式の髪飾りで飾っているか、ターバン風のもを被り、それに豪華な飾りをあしらっています。この後者は太子菩薩といい、太子時代の釈迦を表わしたものであるという見方があります。

菩薩の種々の胸飾りは、私達に様々な幻想を抱かせました。首に近い部分の幅広い飾りは、仏伝の他のシーンに現われる宮廷の女性



杉山二郎先生 (9月29日)

たちにも見られるものでした。この首飾りに重ねて長く胸に垂らしているのは綱状のもので、その中央にしばしば聖櫃を両脇から支える有翼のエロス(キュービット)が登場するのは驚きでした。エロスはギリシャ以来のモチーフで、東洋では飛天にも変化して行くものです。菩薩はこの他に、左肩から右の二の腕にかけて、二本の聖紐をつけ、更に、左肩から右脇に下りる護符を幾つもぶら下げた紐をつけています。こうした複雑な飾りは、我が国の菩薩像においても早く見られず、仏像創始時における当時の人々や彫刻家の仏に対する熱烈な願望を目の当りにする思いです。

その他、ギリシャ風の女神像は、日本に至ると中国的な衣裳に身を包み、ローマ風の四天王の肩にかかる小さなマントは、我が国の四天王の肩にも現われ、イラン系のファロー男神像の脚部に見られる連珠文が日本の菩薩像の脚部にもあり、釈迦の衣褶に表わされた二本一組の線や翻波式衣文なども中国を経て、我が国にまで伝えられています。

ガンダーラからは最も遠く隔った東洋の果て日本においても、仏像の源流は脈々と受け継がれ、美しい変貌をもとげているのです。

この展覧会の間、二回の講演会は、両先生の魅力溢れるお話しと豊富なスライドの上映によって、満員の聴衆を堪能させました。

(村田靖子)

菩薩立像 富岡美術館蔵 (胸飾り)



同左 (頭部)

